ホットな福祉情報紙
はあとふる・ふくしま 別冊 福島県災害ボランティアセンター通信
Vol.23 2012年2月20日発行

福島県各地に、
全国から様々な形の応援が寄せられています！
そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

福島へのラブレター

音楽家
大友　良英さん
（東京在住）

18歳で東京に出て以来、福島は正月に帰るだけの場所でした。ところが震災以降たびたび福島を訪れ、プロジェクトを立ち上げフェスや学校をやるなかで、古い友人達と出会い直し、新しい仲間達が出来ることで、私にとっての福島はまったく新しい場所に生まれ変わりました。震災や原発事故はとてつもない不幸を私達にもたらしました。それでも、ここから次を始めるしか僕らには道がありません。だったら福島から次の未来が始まったんだと言われるような、そんな活動を福島の皆さんと一緒に、福島の内と外、日本の内と外を結びながら出来たら、そう思っています。

一般社団法人
コミュニティ・4・チルドレン　代表理事
JPCom代表
桑原　英文さん
（福岡県出身　大阪在住）

大学時代に一度だけお邪魔した福島の地がこのような状況になるとは想像もしていませんでした。今もなお、福島県の方々、東北の方々が、解決の糸口のない様々な問題と戦っておられます。日常の些細なことにもつい目くじらを立ててしまい、いつもの自分を見失ってしまいます。いつもならしないことをしてしまい、することができないと言う事が起こってしまいます。東日本大震災が、原発がもたらしたことは、あまりにも非情に私たちを苦しめています。それでも、私たちは立ち上がっていかなくてはなりません。これから大切なことは、いつでも、どこにいても「伴」にあることだと思っています。

リレーエッセイ

福島の春を

エッセイスト　大石　邦子

忘れようにも忘れられないあの日から、もうすぐ1年になる。大きな被害を受けられた方々のことを思ったら、会津の私が、「怖かった」などと言ってはいられないが、それでもやはり怖かった。強大な地震の前には、車椅子のブレーキなど何の役にも立たない。車椅子は右に左に勝手に走り、柱にぶつかって半回転し、硝子戸に突っ込み、階段に衝突して止まった。私の悲鳴に、たまたま水道工事に来ていた若い男性が走ってきて、私は思わず彼にしがみついた。男の人に抱きつくなど、生まれて初めてのことだった。抱きついたまま長い余震に耐えた。前後6分の激しい揺れ！その後も余震は続き、更に報じられた巨大津波の映像に息を呑んだ。何もかもが流されてゆく。人も車も家も木立も…。

避難所は着の身着のままの人で溢れ、歩く余地さえないほどに見えた。しかし、そのときはまだ、原発の事故が更に追い打ちをかけることなど、想像もしていなかった。その夜は、さすがに心細かった。あちこちに出来た青あざを見つめていると、一人であることの痛みが傷にもまして痛んだ。

メールが入った。携帯の青い光りに飛びつくと、メールの主は講談社の元編集者で、私の本を何冊か担当してくれた女性だった。電話は通じない。それでも誰かに繋がっていると思えることが、こんなにも心強く思われたことはない。彼女は余震のたびに安否を気遣い、メールの向こうで、一緒に眠らずにいてくれた。

人の優しさは、人の心を動かす。私は不意に我に返ったように、海の近くに住む知人友人のことが気になりだした。電話は何度かけても通じない。胸騒ぎがする。特に、車椅子の友人たちはどうしているか。避難所でトイレは大丈夫だろうか。介助は頼めるか。飲まず食わずを耐えることは出来ても、排泄には限界がある。恥ずかしいとか、情けないとか言ってはいられない事態だが、考えるだけで、人ごとならず涙がこぼれてくる。頑張れ！

今回のことで、人生を大きく狂わされた人々の悲しさは、言語を絶するものであると思う。現実を受け入れられずに、今も尚、苦しみ続けておられる方も多いだろう。私も22歳のときに、一瞬にして人生を断ち切られた者として、とても人ごととは思われない。それでも、時は流れ、いつしか時は私を強め、生きる力を与えてくれたように思う。

終わりは、全ての始まりである。明日を信じて、人生の冬を乗り切ろう。必ず春は来るはずだから…。

福島の春を、私は心から祈っている。

［プロフィール］　大石　邦子（おおいし　くにこ）
会津本郷町（現・会津美里町）生まれ。22歳のときに交通事故に遭い半身麻痺となる。12年余りの療養生活を経て自宅に戻る。以来、車いす生活を続けながら執筆・講演活動を行っている。著書に「この生命ある限り」「この愛なくば」「この胸に光は消えず」などがある。

外国出身者とその支援に関わっている皆さんへ

福島県内で暮らす外国出身者のために県国際交流協会では、専用電話と専用メールで様々な生活相談サービスを行っています。ことばは、英語、中国語、タガログ語、韓国語、ポルトガル語に対応しています。三者が同時に電話で会話ができる「トリオフォン」という通訳システムがあり、行政窓口での応対や電話での連絡の際に利用できます。ホームページでは、災害が発生したときに役立つ情報を届けています。

また、ボランティア活動情報については、県国際交流協会と県災害ボランティアセンターとが、連携しながら情報を提供しています。皆さんの周りにこうした窓口があることをまだ知らない方がいたらぜひ伝えてください。

●外国出身者のための生活相談サービス（相談無料）●

専用TEL024-524-1316　　専用mail　ask@worldvillage.org
(公財)県国際交流協会　福島市舟場町2-1　福島県庁舟場町分館2階
TEL024-524-1315　http://www.worldvillage.org

“ふくしま”から「ありがとう」の気持ち伝えよう！

～福島県社会福祉協議会では、『ありがとう』のメッセージを募集しています～

3月11日東日本大震災、その後の東京電力原子力発電所の事故により甚大な被害を受けた福島県。あれから間もなく一年が経とうとしています。

私たちは、震災直後から沢山の人たちに支えられてきました。親戚、友人はもちろんのこと、ご近所さん、今まで知らなかった同じ福島県民、県外から応援してくれた方々…。数えきれない人たちから、様々な形で応援をいただきました。その気持ちに少しでも『ありがとう』と伝えたい…。

福島県社会福祉協議会では、『ありがとう』の気持ちを伝えるためのホームページを用意しました。震災直後から今までに受けたたくさんの支援や応援、励ましに対する『ありがとう』の気持ちをお寄せください。

ご応募先
◎パソコン
URL　http://www.fukushimakenshakyo.or.jp/
◎郵送
〒960-8141　福島市渡利字七社宮111番地　福島県社会福祉協議会「ありがとう」の気持ちをご紹介　係

こんにちは、生活支援相談員です！　郡山市社会福祉協議会

こんにちは、郡山市社協の生活支援相談員の5人です。富岡町、双葉町、川内村の生活支援相談員に協力して、仮設住宅内の集会所で行われているサロンの運営のお手伝いをしたり、避難元の生活支援相談員と一緒に民間借上住宅の訪問をして、郡山市の情報を提供したりしています。

また、地域の民生委員などから、民間借上住宅に避難している方の相談を受けて、避難元の行政や社協、関係機関などにつないだりもしています。地域で行われるサロンや、イベントなどに、民間借上住宅にお住まいの人へ参加を呼びかけ、一緒に楽しんでいただける環境づくりもしています。

一時的かもしれませんが、同じ地域に住む同士、助け合ったり、支え合ったりできる地域にしていくサポートをしていきたいと思います。

左から北見奈々、幕田香織、神山貴裕、齋藤知美、伊藤良浩

編集後記

目の前にいる子どもの目を見ていると、この子の「夢」は何だろう？と考える。自分は、その夢を叶えることができるよう全力で支える人間でありたい。と改めて誓う。　（佐藤正紀）

最新情報はホームページでご覧ください！
http://www.pref-f-svc.org

5ヵ国語（English、Chinese、Korean、Português、Tagalog）で翻訳の「はあとふる・ふくしま 別冊」がご覧になれます。
■協力：多言語センターFACIL

がんばろう、日本。
がんばろう、東北。
がんばろう、福島。

次号は3月19日発行です。